
英国紳士の弟は英国変態？

英国変態

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英国紳士の弟は英国変態？

【Nコード】

N4944Q

【作者名】

英国変態

【あらすじ】

魔法世界の英雄”サウザントマスター”

彼の子供”達”が生まれた。一人は純粋な魔法使い。

だがしかし、もう一人の弟はその世界に存在しないアラガミの力を持った転生者。悲劇はそこで終わらない。兄は自称英国紳士。だが弟の方は……？

プロローグ

——ここは？何処なんだ……？

——ここは精神の世界……。君は選ばれた

——何に？俺を早く戻してくれ！

——そうしな……。あれ？俺は……。誰？

——君は今、体と魂が別れている状態

——魂が保持する記憶には限りがある

——で、どうするかね？

——君が選ぶのは二つに一つ

——転生して生き返るか

——ここで魂の崩壊を待つか

——転生？崩壊？ここは何なんだ？お前は誰だ！

——ここは世界と世界の狭間

——君は選ばれた

——神の……余興に

——余興？ふざけるな！

——俺を元の世界に返せ！

——俺には大せ、、

——フッフ、怖いか？

——大切な者の記憶を失い

——自分が何者かさえ分からない

——そんな恐怖から……解放されたいか？

——手を取れ、■ ■ 愛 ■

——そうすれば記憶を入れてやろう

——怖いだろ？無知が？

——安心しろ、転生先でお前は英雄の息子になれる

——人生薔薇色だ

——手を取れ！ ■ 崎 ■ ■ ！！

——俺は……………

少年は選択した

自らの手で

それが限りなく強要されたモノでも

ゆえに、神も関与しない

例え、邪神と呼ばれる

悪に人生を蹂躪された者にも

神は関与しない

少年は飛んだ

邪神の手で

そこは歪んだ正義が横行している世界

剣と魔法のファンタジー

一見聞こえはいい言葉

だが少年よ、忘れるな

剣は人を殺すためのモノ

魔法は諸刃の剣

癒す事も出来れば

傷つける事も出来る事を

例え、殺人によって

心が朽ち果てようと

神は関与しない

変態、麻帆良に発つ

…… 大変です。

実は俺、飛び級して卒業式なんです。

しかも、もうすぐ卒業証書が渡されます。

何が大変かって？

だって、俺って元々は善良な一般ピーポーなんですよ？

あ、自己紹介が遅れましたね。

サギー スプリングフィールドと申します。

ええ、皆さんの予想は当たってますよ？

英雄の妄信者、薬味の弟です。

ちなみに、F a t e 風のステータスでいうとこんな感じです

【クラス】：アラガミ

【真名】：サギ・スプリングフィールド

【性別】：男性

【身長・体重】：133cm・35kg

【属性】：中立・中庸

【ステータス】

筋力	A+	魔力	A++
敏捷	B	幸運	E
耐久	EX	宝具	EX

【保有スキル】

神性A

本質がアラガミのため、神に分類される

オラクル細胞EX

オラクル細胞のおかげで、通常攻撃を完全無効化。
気に乗せた攻撃であろうとダメージは通らない。

心眼B

修行、鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

【宝具】

我が手は神の武器B

神機を手に呼び出す事が出来る。

神機によって捕食した相手の能力、スキル、記憶などを任意で自分に取りこむ事が出来る。

神の捕食蹂躪EX

任意のアラガミをこの世界に呼び出す。

呼びだせる数の限界は使用者に依存する。

王の根源A++

厳密に言えば宝具ではない。

英雄との仮契約によって作られた指輪である。

効果は指輪を付けた状態で触れた相手の感覚支配。

第三者を媒介として広める事の出来る、云わばウイルス。

だが、使用中は精霊の加護を受ける事が出来ない為、

一般的な魔法を使用する事は出来ない。

最強？まあ否定はできませんね。

神の捕食蹂躪なんてチート？って言いたくなる能力ですし。

真ビルクリム！とかほざいてハガンコンゴウを8体呼び出したときは、

本当に命の危険にさらされました……。

戻しても良かったんですけど、俺にも意地が……ね？
他にもヴィーナス4体とかも……軽く泣けました。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ ネギ・スプリングフィール
ド！」

「はい！」

どうやらネギが呼ばれたようですね。

俺ですか？常に王の根源を付けているために、
普通の魔法は使えません。まあ普通の……ですが。

苛め？ありませんよ？

常に女の子を周りにおいてたので男の友人は少ないですけど、
嫉妬とかから襲ってくる馬鹿と闘ったこともありますし、
ネギみたいに知り合いはアーニヤのみ、って感じではないです。

「次！メルディアナ魔法学校卒業生代表！ サギ・スプリングフィ
ールド！」

どうやら俺の番みたいですネ。

ネギとアーニヤがいるということは……三番目？

なんとなくフェイトが思い浮かびましたね。

原作を知っているとビミョーなところで気を使っています。

なんとなくアーニヤにも手を出しずらいです。

「はい……つと。あざーす」

「死ね！天然ジゴロ！」

「奴が去った！ようやく俺にも春が！」

「サギ様……何時か絶対またお会いしましょう……」

「きゃー！サギくん！こっち向いてー！」

なんですかね？

この明らかな温度差は？

まあ女の子にモテるのは良いですね。

魔法薬で精通してたので、肉体関係を持ってた子もいましたし……。

そういえば、修業先って麻帆良なんですよ？

あそこのクラスは英雄の息子の為に作られたクラスですし。

俺の息子がお世話になっても良いんですかね？（笑）

個人的に狙いはエヴァンジェリンと真名と刹那ですかね？

俺ってSっ気のある子を服従させるのって好きなんですよ。

特に刹那ちゃんにいたっては目の前でこのかちゃんを頂きながら、お預けをさしてみたい……アア！すっごく良い表情になりそうじゃないか……。

「ネギ、サギ、修業先はどうだった？

私はロンドンで占い師の修行だって」

「僕は……日本で先生をやること！？」

「ん……俺もだな」

「「ええー！」」

さてさて、俺は美味しく美少女を頂きますか。

俺？驚かないよ？元老院とは協力関係？ってか一方的に利用しあってるし、

今回の件は原作知識だけじゃなくてそつちからも聞いてましたからね。

母の仇？そんなもんじゃないですよ。

アリカさんには会ってほのぼのとした家族生活を送りたいですけど。

元老院が私利私欲のためにやったこととはいえ、

あの投獄のおかげで民衆の不満を一手に集める事が出来ましたし。

政治的行動としては間違っていないと思いますからね。

まあ、母親を投獄された怒りも無いわけじゃないんですけど、生きてるみたいですし結果オーライかな？っと。

まあ俺個人としては麻帆良の方が嫌いですけどね。

あの認識障害の結界はふざけ過ぎです。ネギまの世界自体がああい
うはちゃけた世界なのかと思ってましたけど、ここの学校の感じを
見る限りでは、魔法や気が存在しないと言う所を除けば一緒です。
それなのに、あそこまでふざけると言う事はそういう環境を異常
と思えない効果も副作用かどうかは知りませんが少しは入ってるみ
たいですしね。

そのおかげで俺は美少女を美味しく頂けるわけですけど。
せいぜい足掻いて俺を楽しませて欲しい物ですね。
覚悟してくださいよ？タカミチ、それに……ぬらりひょん。

変態、麻帆良に発つ（後書き）

遊戯王の方がうまく書けない……。

ネギまの方が人気でるみたいですし、しばらくはこっちを中心に更新するかもしれないと言っておきます。

変態、麻帆良に着く

「あなた、失恋の相出てますよ」

「なあんですってこのガキい——っ!？」

「取り消しなさいよおおおっ!」

「あう~~~~っ」

流石ですね……ネギ。

原作で知っているとはいえ、目の前で本当に言うとは予想外でしたよ。

俺も何か言った方がいいんですかね……？

俺の見事なセリフと言葉使いで近親ニヤンニヤンルートに行きますか！

「あなた、見事なパイパンですね」

痛いです……。

あの後本気で蹴られまくりました。

気を使ってもダメージを食らわない俺を痛がらせるなんて！
アスナっ！恐ろしい子っ！！

てかよく考えたら、ダメージを食らった理由って何なんですかね？
魔法完全無効化能力？咸卦法？それとも……ギャグ補正？

あの後、ネギがアスナちゃんの服を吹き飛ばし！（ネギグツジヨブ
！）
タカミチに連れられてぬらりひよんの元に連れて行かれました。

それにしても……このぬらりひょんは馬鹿みたいにエラそうですね。
椅子に腰かけてタカミチを横に置いて、探るような眼をこちらに向けて。
全て自分の思い通りになるから自分が王になったつもりなんですか
ね？

「すつごく、大きいです」

「ふぉ？どうしたのかの？サギ君」

「あ、気にしないでください。ただ人類から妖怪になれるんだなあ
……」

「妖怪ではないぞ？立派な人間じゃ！」

「はぁ……子供相手に剥きになって、あなたはそれでも学園長ですか？」

「……………」

まあ普通に考えたらこの妖怪って学園長の資格まったく無いんです

よね。

英雄の子供のために、ひとつのクラスに異常を集めたり。自分の孫であり、生徒であるこのかちゃんをネギと同棲さして魔法バレを誘発しようとしたり……。

あれ？学園長だけじゃなくて祖父としても失格？

「ようこそ、ネギ君、サギ君。君達はここで先生としてやっていくことになる。」

そこにいる二人のクラスの担任と副担任となってもらう」

「ええー！？高畑先生はどうなるんですか！」

「ゴメンね、アスナ君。僕は海外に出張とかが多いから彼らに任せることにしたんだ」

「そんなあー？」

「ゴホン、そうそう。実は二人とも、まだ住む場所が決まっておらんのだよ。そこで、しばらくネギ君を君らの部屋に泊めてもらえんかの。サギ君は……高畑君の所に泊まってもらおうとするかのぉ」

「異議あり!!」

このぬらりひょんめ……!

俺のウハウハハーレム生活を妨害する気かつ!

「何かの?サギ君?」

「タカミチと一緒に暮らすのはむさ苦しいので嫌です!」

「……………。だがのう、空いてる部屋も無いのじゃが……………」

「ああーそういえば俺って教員免許とった記憶ないなー?どーし」
「分かった!早急に手配するわい!教員免許は大学の課程で取ってる
はずじゃ!」

頑張るな…………ぬらりひょん。一息に言い切ったぞ。

「んじゃ、ネギは姫子ちゃん達と少し周辺を探索してきな。俺はこのぬらりひょんとO H A N A S Iが会って少し時間がかかり

「そうだからな」

「うん、分かったよ」

「姫って私達のこと？私はそんな柄じゃないんだけど。
高畑先生行って来ますね。ホラ、ネギ、早く行くわよ？」

「ほな、ネギ君も行こなあゝ」

ようやく人払いが終わりましたね。
姫子ちゃんって言ったことでタカミチがポケットに手を入れてこつちを睨んでいますね。

この妖怪は狸でもありますから、一息につて相手に誤魔化されないようにしないといけませんね。

「どうしたのかの？サギ君。君の部屋については龍宮君と桜咲君の部屋にしてもらうつもりじゃが」

「一つ、俺を夜の警備に参加させること。報酬は後で俺の戦闘力を見て貰ってからで構いません。

二つ、Evangeline A・K・McDowellの封印の解除。これにいたっては学園結界の方の魔力封印も解除させて

いただきます。

三つ、神楽坂アスナが魔法にかかわったときに、黄昏の姫御子ことアスナ・ウェスピーリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの封印した記憶について教える事。

この三つの要求が飲めないのならば、黄昏の姫御子の事を元老院へと報告さしていただきます」

「どういづつもりかの？サギ君」

これが歴千の猛者の気迫と言つやつですか。

正直なところ……温いですね。元老院と話し合った時はなんていうか……こう、嫌な気迫が出てましたからね。ああいう気迫はちょっと苦手だったりします。

「いやいや、簡単な事ですよ。ただ俺の要求を吞んでくれればいいだけです。」

ちようど学園の警備人の数も足りないみたいですし、E v a n g e l i n e A . K . M c D o w e l l の解呪に関しては父に頼まれた物ですしね。三つ目に関しても当然でしょう？ガトウさんの遺言を忘れたんですか、タカミチ？ガトウさんはアスナちゃんに幸せに生きるように願ったんですよ？それなのにネギと同室？笑わせるともりですか？」

「そこまでにしてもらおうか、サギ君。」

アスナ君の保護者は僕だ。君にとやかく言われる筋合いはない」

「そちらこそふざけるな、です。」

一応血筋的には親族ですよ？そんな人をみすみす戦場へと連れて行かせると？

それに、アスナちゃんとこのかちゃんとは同室ですよ？あわよくば魔法をバラしてしまおうという魂胆ですか？関西呪術師協会に連絡入れますよ？」

「そのようなつもりは一切ないぞ。ネギ君は優秀な魔法使いじゃ。魔法の秘匿の重要さはきちんとわかっておるはずじゃ。それに、このかに魔法を知らせようなどとは企んでおらん」

笑えますね、これ。

元老院は自分たちの企みを見破られた時点で自分たちの側へと取りこもうとしましたよ？

自分の非を認めず、誤魔化し続ける正義の魔法使いの典型ですね。

こちらを真剣に見つめてそんな事はない、と言う風に見せ続ける技術だけは感心できます。

まあ、そんな技術は糞の役にも立ちませんけどね、交渉で大事なのは如何に相手を躍らせるか。

これだから、麻帆良は何時までも元老院の手の先で踊らされているんですよ。

「そうですか、では、このかちゃんにお見合いをさせているそうですが、その中に魔法使いに連なる人物はいませんか？あなたの家系は唯の家族ではないのですから西の意向も聞かずにお見合いをさせるのは不味いと思うのですが？」

「ぐっ……要求を呑もう。深夜0時に世界樹の前まで来てくれ」

「学園長！」

クツクツク、言い様ですね。

力無き英雄と落ちぶれた老魔法使いは素直に若い者の意見を黙って聞いておけばいいんですよ。

「では、ありがとうございました。

ちなみに、俺はすでに立派な魔法使いとして元老院に認められているので、そういう方面から脅そうとしても無駄ですからね？」

「っ……！そんなことはせんよ。ではサギ君、今夜は宜しく頼むぞい？」

「ええ、それと忠告です。
ネギは魔法使いの村に住んでいたために魔法の秘匿意識は異常なまでに低いですよ？」

言うだけ言っただけ俺は部屋から立ち去ります。

部屋から出るときに見たタカミチの絶望した顔とぬらりひよんの苦々しげな顔は中々の物でしたね。

まあ俺的には女の子がおもらししたときの羞恥顔とか、
痛みや屈辱に悶えた真つ赤な顔の方が好きなんですけどね？

変態、麻帆良に着く(後書き)

はい！知能派サギ君！と言いたいところですが、
やっぱりサギ君の本質は変態です。そこは覆りましえん！

番外、妖怪の憂鬱

「サギ君ですか……彼はなかなかの曲者ですね」

「そうじゃのう。メルディナ魔法学校の報告では。」

1・女癖が非常に悪い

2・性格は活発、父よりも母を探す傾向あり

3・普通の魔法をあまり使いたがらない、使えばサウザントマスターに勝るとも劣らないほどの威力の千の雷を無詠唱で軽くはなっていた。

4・普段使うのは特殊な召喚術と純粋な魔力のみをつかった創造魔法。

どちらも使用は本人しかできない模様。

5・身体能力は異常

6・お金への執着も異常

7・しつこいようだが女癖が酷い」

「これは……どんだけ女癖悪いんですか！

自分の祖父に二回も言われるって……相当ですね」

「タカミチ君は向こうに会いに行った事もあったじやろう？
二人はどんな感じじゃった？まさか……ネギ君もかのう……？」

「いや……ネギ君は純粹……だったはずですよ。
そういえばサギ君は学校で”歩くサラブレッド”と言われていましたね」

「……………龍宮君と桜咲君の部屋に住まわす予定じゃが大丈夫かう？」

「多分……彼女達はN〇と言える子ですから大丈夫ですよ。多分……？」

「それよりも……アスナ君のことじゃ。
彼は恐らく事あるごとに彼女を引き合いに出して何かの要求を出してきそうなのじゃが……」

「お金と女性で釣れるんじゃないんですか……ね？
あの二人の子供ですし、純粹に悪い子ではないと思うんですけど」

「「はあ……」」

番外、妖怪の憂鬱（後書き）

ちよつとした短編。

タカミチと学園長の苦悩です（笑）

変態、アラガミを呼ぶ

そろそろ12時ですね。

俺が何をしてたかですか？

そのへんをフラフラ歩きながらこっそり学園結界を改造してエヴァンジェリンの登校地獄を解いておきました。まあダミーで効果の発揮しない呪いをかけているので呪いが解けているのには気付いていないかと思えますけどね。

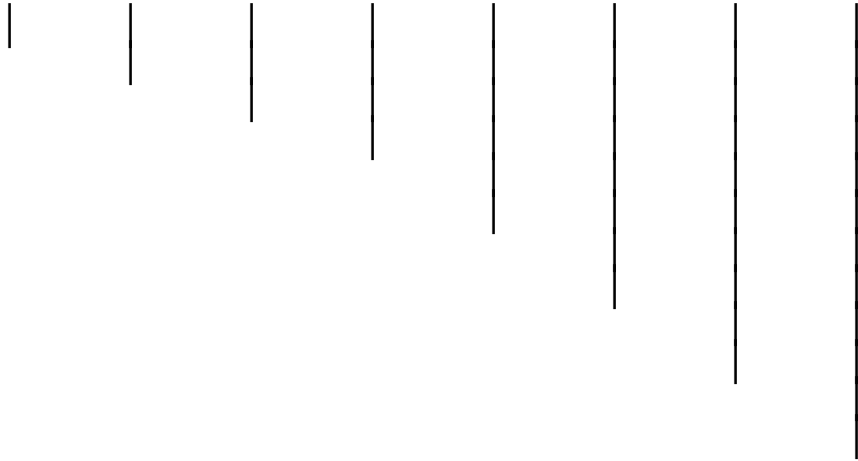
「アデアット」

今、俺の指には銀に光る怪しげな指輪があります。
これについて触れた事は少ないかもしれませんが。

これは、六年前の村襲撃事件が終わった後、隙を見て父さんと仮契約した時に出了た指輪です。
まあキスした後には必死にアルコールで口を消毒した姿を見てちょっと泣きそうな顔でしたけどね。

さて……哀れな自称正義の魔法使いに本当の正義を教えてあげましょうか。

ついでに誇り高き悪がどれほど情けない物なのかもね……。



「どーも、美しい女性たち。

サウザントマスターの意思を受け継いだサギ君ですよ キラーン」

ふっ……決まりましたね。

タカミチはすっごく胡散臭そうな目で見てますが。

高音さんでしたっけ？は完全なトロ目です。

ガントルさんも憧れのような目で見てますね。

英雄の息子のバリエーションはこういう所で便利ですね。

「で、ぬら……学園長。誰と闘えばいいんですかね？個人的には全員と闘っても良いんですけど」

今のセリフでちょっと空気が温くなりましたね。

馬鹿にしていると言うより……自信過剰と思われています？

「うむ、タカミチ君とやってもらう。別に勝てなくとも良い試合をすれば給料は弾むぞい」

「いくよ、サギ君。先手は譲るよ」

……？

それは強者が弱者に言うセリフでしょ？

よろしい、ならば戦争だ。

「発動、神の捕食蹂躪。召喚するは三頭のオウガ」

ふっ、全員異常なまでに驚いていますね。

高々タカミチ相手に俺が戦うはずがないでしょう？

「サギ君、どういうつもりかな？その椅子はどっから出したのか、何故君が悪魔を召喚できるのかも気になるんだけどね」

「まあいいじゃないですか。高みの見物ってやつですよ。それにこれは悪魔じゃありませんし、タカミチが最後まで勝ちぬけたのなら僕が戦いますよ」

その言葉と同時に吹き飛ぶオウガテイル達、
流石にふざけ過ぎたかな？いきなり豪殺居合い拳とか本気すぎますし。

しかも何時の間に咸卦法をやったんですか？

「これでどうだい？君は満足できたかな？」

「子供相手に大人気ないですよ？今のはウォーミングアップですし。発動、神の捕食蹂躞。召喚するはヴァジュラ・シユウ・クアドリガ。今回はさつきみたいな雑魚とは違いますよ？本気でいかないと……死ぬかも？」

今回は流石のタカミチも苦戦しているみたいですね。

原作でのアラガミみたいに意味のない行動はしませんしね、まあ俺が操ってるって言うのが大きな理由ですが。オートで動かすと原作みたいな雑魚い動きはしませんけど、対して強くはありませんしね」

ちなみに、中央ではタカミチがクアドリガが放ったミサイルを居合い拳で撃ち落としているとこですね。

シユウは既に生きてあてますし、ヴァジュラに至っては瀕死。

まあそれでもタカミチも全身ボロボロで戦えそうにないのには変わらないんですね。

「はあはあ、これで満足かい？サギ君？」

なんかこれだけ聞くとちょっぴしエッチいですね。

流石にノンケですのでタカミチに頂かれるのは勘弁してほしいですが。

「流石は英雄と言ったところですかね？けど……時代は新しい時代へと変わっているんです。

発動、神の捕食蹂躞。召喚するはディアウスと四体のプリティヴィこれでもまだ闘いますか？さっきまでのが纏めて戦闘力200としたら、今回は600近くありますよ？」

「ハハハ、僕の負けだよ。サギ君。一度だけでいいから君の本気を見せてくれないかな？」

「召喚術の本気でしたら……これが本気ですね。

発動、神の捕食蹂躞。スサノオ・ヘラ・ポセイドン・ゼウスそして……アマテラス・ツクヨミ」

やっぱりアマテラスが目立ちますね。

でかいですし……周りの人も目がポカーンとしています。

「……勝者サギ・スプ「待て」なんのようじゃ……エヴァ？」

出ましたね。自称誇り高き悪（笑）

まあエヴァンジェリンにはボディタッチもするつもりなので近接戦で戦いますかね。

真っ平らな胸をナデナデしてあげますよ、キティちゃん♪

「貴様あ！殺してやる！」

「おろ？どうしたんですか？そんなに怒って」

「サギ君……考えてる事が口から出ていたよ？」

「そりゃ失敬。では闘おうか？キティ」

「貴様だけは殺す！」

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け『魔法の射手・連弾・氷の17矢』」

「しよぼ……展開・盾」

俺が展開した魔力の盾によってエヴァンジェリンの魔法は全て止め

られます。

封印も解除出来てないのに勝てる訳ないんですけどね。

「パチツ、封印は解除してあげましたよ？

良かったですね、本気で出せますよ？それともなんですか？

愛しの父さんに掛けられた呪いを解かれて怒ってるんですか？」

「何が、愛しのだっ！ハッハッハ、ようやく憎きサウザントマスターの呪いが解けた！

感謝するぞ！サギ・スプリングフィールド。お詫びに貴様に世間の厳しさと言う奴を教えてやろう」

周りから雑音がうるさいですね。

みんなの大好きな正義で黙らせてやりますか。

「みなさん！相手は悪です！そして我々は正義！何処に負ける要素が有るのですか？

この次世代の英雄である俺がエヴァンジェリンを見事に御してみせましょう！」

これでみんな黙りましたね。

正義バカはこれでころつと騙されますからね。
強いて言うなら龍宮さんあたりが俺を胡散臭そうな目で見てるぐらいです。

「ふっ、正義が悪に負ける瞬間を見せてやる！
リク・ラク・ラ・ラック・ライラック
契約に従い、我に従え、氷の女王。来た「遅い！」へぶう……」

「連続想像！剣の50刺！」

てか本当に長々と詠唱するとか馬鹿なんですかね？
そんな馬鹿だから地面に剣で張り付けられるんですよ。

「ああ、蝙蝠になって逃げるのも無理ですよ？その剣には特殊な術式を仕込んでありますからね」

「くっ……」

「ああそうそう、悪つてのは敗北者の事です。つまりあなたは今まで一生懸命”誇り高き敗北者（笑）”を語ってたんですよ？馬鹿ですよ、ホント」

縄を使つてキティを縛ります。

当然の如く亀甲縛りからのグルグル巻きです。

亀甲縛りは漢のロマンですからね。

「では学園長先生。今からキティに正義の大切さを心の奥底まで、
ついでに言つと下半身からお腹の中まで注ぎこんであげようと思う
んですが。俺はこの部屋に泊まればいいんですかね？」

「う……うむ。桜咲君と龍宮さんのところじゃ。二人に案内しても
らうくれ」

「せ……先生、こちらです」

「う……うん、先生はこっちだよ」

なんかすつごくどん引かれています。
やっぱりキティを亀甲縛りにして首輪を付けてその鎖を持って引っ
張ってるからですかね？

大丈夫……、安心して下さい二人とも。
こんなのが異常とも思えないぐらいに可愛がってあげますから……
フフフフ。

変態、アラガミを呼ぶ（後書き）

茶々丸はメンテ中という設定です。

茶々丸が出てくると普通に壊れそうですしね。

機械だからどんなプレイでも行ける！って感じでまじでダッチワイフみたいに使われそうなんで今はお預けです。

失敗しました。

ネギは学園長と会ったときに直接教室に行くんですねw

常識的に考えて一日後だと思ってましたwww

サギ君が登場したことに対する世界のブレだと思ってくださいw

変態、自己紹介する

【クラス】：アラガミ

【真名】：サギ・スプリングフィールド

【性別】：男性

【身長・体重】：133cm・35kg

【属性】：中立・中庸

【ステータス】

筋力	A+	魔力	EX
敏捷	B	幸運	E
耐久	EX	宝具	EX

【保有スキル】

神性A

本質がアラガミのため、神に分類される

オラクル細胞EX

オラクル細胞のおかげで、通常攻撃を完全無効化。
気に乗せた攻撃であろうとダメージは通らない。

心眼B

修行、鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

【宝具】

我が手は神の武器 B

神機を手に呼び出す事が出来る。

神機によって捕食した相手の能力、スキル、記憶などを任意で自分に取りこむ事が出来る。

神の捕食蹂躞 EX

任意のアラガミをこの世界に呼び出す。

呼びだせる数の限界は使用者に依存する。

王の根源 A++

厳密に言えば宝具ではない。

英雄との仮契約によって作られた指輪である。

効果は指輪を付けた状態で触れた相手の感覚支配。

第三者を媒介として広める事の出来る、云わばウィルス。

だが、使用中は精霊の加護を受ける事が出来ない為、

一般的な魔法を使用する事は出来ない。

これが僕のステータスですね。

ちなみに、他の人をステータスであらわそうとするならば、

【クラス】：見習い魔法使い

【真名】：ネギ・スプリングフィールド

【性別】：男性

【身長・体重】：123cm・35kg

【属性】：混沌・善

【ステータス】

筋力	H	魔力	A
敏捷	F	幸運	A++
耐久	H	宝具	-

これがネギのステータスですかね？

筋力とか耐久はカスレベルですねww

ネギの膨大な魔力で強化すれば三段階アップってところですかね？
ちなみに、俺のEXとかは普通はありません。

アラガミ細胞に対抗できるは神機のみですけど、誰も所持していないので広範囲殲滅魔法で一つの細胞も残さないレベルで消しつくさないとは不可能です。

魔力に関しては、常に辺りの空気から魔力を捕食しているので測定不能↓EXということです。

他にはタカミチとかもいつてみましょうか？

【クラス】：格闘家

【真名】：高畑・T・タカミチ

【性別】：男性

【身長・体重】：175cm・64kg

【属性】：中立・善

【ステータス】

筋力	D	魔力	D
敏捷	D	幸運	C
耐久	E	宝具	-

こんな感じですかね？

ていうか普通に考えてこれぐらいです。

咸卦法を使って……一段階アップですかね？

ネギより上がるランクが少ないのは、H↓EとD↓Cでは身体能力の上昇幅が違います。

ランクはAに近くなればなるほど、一つ変わるだけで異常なまでに変わりますからね。

後は俺の宝具の解説でもしましょうかね？

我が手は神の武器B

まあ分かりやすく言えば神機ですね。

普通にオラクル細胞を弄って普通の剣を作ることができます。

ちなみに、いつか話すつもりですが、悪魔を数体捕食してそれを発射したらかなりの威力でしたね。

リヨウメンスクナノカミを捕食すれば……フフフ。

神の捕食蹂躞EX

これは弱点が無いように見えて結構あります。

まず、発動には精神力を使うので限界まで召還するとフラッってなりますw

もう一つは、自分で動かしているときはそちに意識が行きがちになるところですかね？

王の根源A++

これは……すつごくピーキーな指輪です。

装備中は魔力を異常な量奪われます。（このためサギの魔力量はネギと同等）

さらに、普通の精霊魔法も使えなくなるために同じ量の魔力を込めても撃ち負けます。

効果は……内緒です。

ただ、恐らくこの小説の中で最ものチート道具だと思われますね。一応アーティファクトなので戻したら魔力も戻って精霊魔法も使えるようになります。

今回はこれぐらいですかね？

何か気になることがあれば感想で書いてくださればお答えします
byサギ

おまけ

名前表記 SAGIUS SPRINGFIELD S

称号 RUFUS REX（真紅の王）

色調 Prisma（虹色）

徳性 sapientia（知恵）

方位 caritas（中央）

星辰性 nigrum foramen（黒い穴）

アーティファクト 王の根源

サギ君の仮契約カードです。

ラテン語とか調べられないよ……w
間違ってたなら教えてください。

変態、部屋に戻る

「さて、俺はどこに寝ればいいのですかね？
あ、質問なら答えますよ？居候の分際ですし」

エヴァですか？

今は大量に黄色い水を飲ましてオムツをつけてカメラの前で縛ってますよ？

ダイオラマ魔法球の中ですけどね……フフフ。

「じゃあ聞かせてもらつよ。あのときの悪魔？はなんだい？
私の目では全くと云っていいほど分からないんだが」

「アラガミのことですか？一言で言えば異世界の堕神ってところですかね？

まあもし俺と戦うことになったら逃げたほうがいいですよ。
最後の二体は俺でもやばかったですし」

いや、これ本当なんですよwww

多分、通常種↓堕神種↓接触禁忌種の順番で強くなってるんでしょ

うね。

接触禁忌種は一体で一騎当万レベルの実力ですし。
アマテラスとツクヨミに関しては……チートですね。

「じゃあ私からも質問させていただきます。
あなたは何かの武術をやっているようですが、あれは何な
のでしょうか？」

「ん？エヴァを抑えた奴のことですか？我流ですよ。俺は少し人体
改造（笑）をして運動神経が通常状態でも恐ろしく動けるので。
それに対応できるように作ったのがアレですよ。まあ他にも、正式
な武と武の戦いに使うための百式観音つてのがありますけどね」

「人体改造……、それは誰にで「受けれるよ。ていうか俺と本契約
したら自動で移るみたいですけどね。します？俺としては常にウェ
ルカムなんですけど。刹那ちゃんとしては残り半分の人間としての
血がなくなっちゃいますけど「!？」」

刹那ちゃんが夕風を持ってそれを真名ちゃんに取り押さえられます。
そんなんだから昔読んでた二次創作で辻斬りwとかこのちゃんラブ
wとか言われてるんですよ。

ていうか認識障害の中ですし翼を出しても他の人に不思議がられないと思うんですけどね？

そこらへんどうなんですかね？千雨ちゃんあたりは絶対に頭を抱えて悩みまくるのは目に見えてますけどねwww

俺はクスクスツと笑ってあげる。

やっぱり女の子の羞恥顔は……最高のオカズですね！

「私からは最後の質問なんだが……、人体改造とはどんなことをやっただい？」

「禁則事項です」って言いたいところなんですけど、まあ自分の体をアラガミに近づけた感じですよ。分かりやすく言えば、最強の再生能力・身体能力、それと捕食能力ですかね？」

「捕食とは……？」

「そこはいくら真名ちゃんでも言えないですね。体をくれるって言うんなら話してもいいですけど？」

「そこに入れられたエヴァンジェリンの様にはなりたくないからね……、遠慮させてもらっよ」

まあいくら体を差し出されても言いませんけどねw

リヨウメンスクナと戦うまではこの能力は押さえておきませんとね。

「私からも最後です。あなたは……お嬢様の敵になりえますか？」

いいですねえ……、その目。

屈服させたくなくなってきました。何に変えても守ると言う意志ですか。

うん……それをへし折って、屈服させて、調教してやりたいですね。

「俺は美少女の味方ですよ」

「そういうことでは……」

後ろで何か言ってる気もしますがスルーです、スルー。

ダイオラマ魔法球でエヴァンジェリンの調教でもやってやりますか……。

変態、部屋に戻る（後書き）

なんか適当感は拭えませんか。

次は番外編ですが、会話文のみです。

というよりも、番外編は会話文しか書きませんw

番外、吸血鬼の調教？

「フッフ、闇の福音と恐れられた私を調教すると言うか、つくづく面白い奴だな、貴様は。」

この縄をほどいた時には覚悟しろよ？私が屈するか、貴様が折れて私に殺されるか、見物だな」

サギはエヴァを縛っている縄を無言できつく締める。

今のエヴァの姿を表すとするならば、胸の間には一本の縄が通っている。しかし、見事な幼女体質とでも言うべきか、見事なまでに膨らみがない。だが、それでも敏感になっている乳首に縄が擦れるようにされているため、少しでも身動きをすれば、途端に全身に快感が疼く。そして、そのまま真っ直ぐ申し訳程度の産毛のみが生えている股間の方へと回っている。

そんな、一糸纏わず、一本の縄のみが体に纏われているにもかかわらず、

闇の福音【ダーク・エヴァンジェル】は余裕の表情を見せ、更にクツクツと笑っていた。

「今まで私にこのような体験がなかったと思うか？

生まれてからの数十年はこんなことが当たり前だったよ。

まあ、そんな事をした奴は一人残らず殺してやったがな」

そう、彼女の絶対的な自信は経験。
まだ真祖となつて間もない頃、彼女は幾度となく男の慰み物にされている。

しかし、彼女の自信は直ぐに打ち碎かれることとなる。
今の自分の相手——サギ・スプリングフィールドは普通の子供ではない。

経験でいえば彼女——エヴァンジェリンよりは遥かに短い物の、
彼は二度生を体感しており、なおかつ魔法球の中で存分に訓練をしているのだ。

何も魔法球の中では戦闘の訓練しか出来ないわけではない。
彼が在籍していたメルディアナ魔法学校での女子学生、彼女達を存分に可愛がる場所として使われた。

普通は学校が終わつて女と寝ようとしても学校が有り、毎日の睡眠時間を削りすぎるのも良くないため、毎日の性交に使われる時間は限られてくる。

しかし、この魔法球ではこの中での一日が外の世界の一時間なのである。

そのため、この魔法球を活かした行動を出来るサギにも、存分な経

験が有る。

「フッフ、確かに貴方は普通に調教しようとしたところで落ちないでしょうね。

しかし、”己が愛した男に為すがままにされる”というシチュエーションはどうですか？

貴方が愛し、ストーカー紛いの事をした挙句、その男に無理やり呪いを掛けた男、

千の呪文の男【サウザントマスター】にね……」

「ふっ、私が幻覚程度に摩くとも思ったか？

それに奴は死んだ。私の中でもあいつは過去の人間なんだよ。

今更、あいつの姿で私をどうしようとしても無駄だよ」

身体を、全身を縛られているにもかかわらず、何処か遠い目をする。それは何処か心の無い人形のようにも感じられた。

「父さんは生きてますよ。ほら、この仮契約カードを見てください。まだ生きているカードでしょ？貴方が何よりも欲しかった証、パクティオーカード」

「な、なんだと！あいつは公式発表では死んだはずじゃ……ッ！」

「耳元でぎゃあぎゃあ騒がないでくださいよ。
少しは静かにしてもらえませんか……お仕置きですよ？」

そう言い、サギは手元にあったエヴァの身体を縛っている縄をキツく引っ張る。

ここまで強く引っ張られれば、恐らく跡が残るだろう。

それに、幾らこういう事をされた事が有るからと言って、精神は慣れても、身体は慣れてくれない。

乳首と肉唇が激しく擦られしまい、まだ序の口だとしても——感じられてしまう。

そして、サギはゆっくりとしたスピードで、エヴァの前へ歩みより、有名どころの赤と青の飴玉でなく、金の飴玉を口に入れる。

それと同時に、サギの姿が何歳も老ける。その姿は大战の英雄【ナギ・スプリングフィールド】

そして、またクツクツと笑いだし、エヴァの首筋へと顔を沈め、舌で首を沿う様に舐める。

「どうですか……俺の作った特別な薬は。幻覚で身体を成長させるようなチャチな薬ではなく、

実際の年齢そのものを変えるんですよ？だから、激しく身体を触れ

合わすときでも使えるんです」

「良かったですね……、あなたの愛した男に抱いてもらえるんですよ？」

「まあ最も、中身は貴方の愛したサウザントマスターが、己が本当に愛した女と性交した末に生まれた、10歳の子供ですけどね」

「そういうのも一興……でしょう？」

「大丈夫ですよ、私は貴方を捨てませんから」

優しく、耳元で告白とも取れる言葉を呟く。
その言葉に反応したと同時に、サギはエヴァの耳を甘噛みする。

「大丈夫ですよ。大丈夫……背負わなくてもいいんです。
あなたは……唯の女の子になってもいいんですよ？もう、怯える必要はない。強がる必要はない。自分の罪を隠さなくても良い。自分の幸せを掴んでもいいんです」

「自分の……幸せ……？」

「そう、あなた個人の幸せですよ。大丈夫、俺が守ってあげますから」

優しく、それでいて大胆に。

頬に手を添えつつ、引き寄せるようにサギはエヴァの顔を引き寄せる。

エヴァは突然の事に驚き、抵抗をする素振りを見せるが、サギの舌が入ってくるのを許してしまう。

「ん……んん！何を、んむッ！？」

一度唇を離す。エヴァとサギの間には、唾液で出来た官能的な橋が出来る。

もう一度唇を付ける。今度は、相手にむず痒い感覚を与えるようなキス。

舌で相手の歯茎を沿うように舐め、相手の下唇を啄ばむように甘噛する。

決して舌と舌を交らわせはしない。ゆっくり、ゆっくりと相手の理性が失うまでそれを続ける。

それは数秒だろうか？数分だろうか？はたまた数時間だろうか？
二人には分からない。唇を離れた後も、エヴァはトロリとした目で
サギを見つめている。

「見つけられたかな？自分の幸せが、言ってごらん」

「私の幸せは――」

「フフフ、よく出来ました。」

よく分かったね。君の幸せは――」

番外、吸血鬼の調教？（後書き）

？は過激すぎるので削除しました、
ノクターンで再開するかもしれません

変態、授業をする

「あ、うう……ちょ、ちょっと緊張してきました」

「少し緊張しますね。俺たちの年齢では普通は授業を受ける側です」

「ほら、ここがあなた達のクラスよ」

スルーですか、しずな先生、

あなたは確か魔法の存在を知っていますよね？

少しぐらい教えてくれてもいいじゃないですか。

「失礼しま……」

あ、忘れてました。黒板消しトラップでアスナさんに疑われるんでしたっけ？

ネギがばれたら俺まで飛び火して来そうですね。

「邪魔です」

「うわぁっ！」

美少女にのみ優しく、がモットーなんでネギは蹴り飛ばします。
可愛い女の子だったらそのまま抱き寄せて……フフフ。

まあそのおかげで紐に引っかかって連続トラップにかかってますからね。

「「「あははははは！ってええ！子供！」「」」

おお……見事なシンクロ率ですね。

さすが英雄達の生贄クラス、裏の関係者＋1以外は見事なシンクロ率ですね。

「今日からこの学校でまほ……英語を教えることになったネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど、よろしく願います」

「今日からこの学校で数学を教えることになったサギ・スプリングフィールドです。まあ兄と同じく3学期のみですけど、よろしくお願いしますね」

なんなんですかね？この薬味坊主は？

まあ学校の先生なんてしょせん立派な魔法使いになるためのステッ
プとしか考えてないでしょうからね。俺ですか？嫁探し兼お遊び、
ってところですかね？

「「「キャアア！！かわいいい！！！」」」

「何歳なの～～！？」

「えっ、その十歳で……」

「どっから来たの！？何人！？」

「ウエ、ウェールズの山奥の」

「ウェールズってどこ！？」

「今どこに住んでいるの！？」

「いま……まだどこにも……」

質問攻めですね。

私ですか？普通に逃げてますよ。美少女に囲まれるのは好きですけど攻められるのは無理です。

ああ、メルディアナが愛しく思われますね……。

英雄の息子って言うのが大きなステータスになりますし、

3-Aほどではないですけど俺好みの美少女もたくさんいましたしね。

「意外だね、先生。あなたならあの混乱に乗じてみんなの胸や尻を揉んでいそうなもんなんだが」

「失礼ですね、龍宮さん。俺のことをそんな風に言わないでくださいよ。」

俺は純粋な子供先生ですよ？そんなことするわけないじゃないですか」

「……………」

すっごくジト目で見られています。
流石にこんなときにしませんよ？ていうか俺が楽しいのは胸や尻を触った後の、羞恥に悶えた表情や、怒りや屈辱に満ち溢れた表情を見るのが好きなんですよ。

「まあ今は少し喋りたい人がいるんですけどね。多分あの感じだとあと数十分は質問攻めですし。
流石に彼女をこの環境で放置しておくのは流石に可愛そうな気がしますし」

「彼女……？先生はまだ私たち以外ではアスナと木乃香ぐらいしか知り合いはいないのではないかな？」

「なんで二人と知り合いなのを知ってるんですか……。
今まで話した事も無いし、対して目立たないあの子に会いに行くんですよ。」

俺はあの子のファンですしね」

「なおさら誰の事が気になってしまっうね。先生が興味を引きそうな性癖を持つ子は向こうの方にいるんじゃないかな？」

「俺好みの性癖ってなんですか……。
別に特に偏った性癖を持っているつもりはないんですけど」

またジド目で見られまくりました。

俺は本当に特殊な性癖なんて持っていませんよ？

ただ付き合っとしたら俺の責めに耐えられるような、というよりも苦痛を快感に変えられるような子が望ましいですけど。

それだけを言った後に真名ちゃんの元から離れます。

目的は勿論あの方。ネットアイドルでNo.1になっているあの方です。

「こんにちは、ちうたん♪」

「な……なん！な……んですか？サギ先生？」

「いやああ、ちうたんって眼鏡はずしたら可愛いと思うんですよ。え。」

「どうしてそんなのつけてるんですかね？外してみたらどうです？」

「ナンパですか？私は生徒であなたは先生。流石にそういうのは不味いと思うんですけど……」

「ん？別に大丈夫だと思いますよ？だってここは……非常識の巣窟でしょ？ちうたん♪」

「え……？」

触りはこれぐらいで大丈夫ですかね？

ネギはこれから授業なんで俺は少し職員室にでも戻りますか。

「えっと、新田先生でしたよね？
最近の中学生はすごく騒がしいですね。中々に大変そうな感じが
すよ」

「ハハハッ、それを言うならサギ先生なんてまだ本当なら小学生を
している年齢でしょう？

まあ、私達も可能な限りサポートしていきますので頑張ってください
い」

「ええ、それとお聞きしたいのですが……今の時期には何を教えれ
ばいいのすかね？

何分、イギリスの山奥にいたために常識などに少し疎いのですよ」

「いやあ、あなたが常識に疎いのであれば今時の大人も大半が非常識
の部類に入ってしまいますよ。

今の時期ですとそうだな……二次関数辺りでよろしいのでは？ま
あ3-Aは少々勉強をしない人が多いので………」

出ましたね、鬼の新田と恐れられる伝説の先生。

俺としてはすごく好感持てるんですけどね。まあ惜しむらくは魔
法使いの手のひらで踊らされているのに気づいていないことですか
ね？

まあここの結界は恐ろしい程の効果を発揮するのでちうたんレベル
で無いとレジストできませんからね。

あれ……そう考えたら学園長はちつたんがレジストしてることに気づいているんですかね？

それなら更に人間失格ですね。

あれはやっぱりおとなしくぬらりひょんでもやっているほうがいいように思います。

それより二次関数ですか……前世では少し苦手でしたね。

今は流石は英雄の血筋？というものが恐ろしくなるぐらい勉強が出来ます。

まあ精霊魔法はアンチヨコみないと無理ですけど……（笑）
俺は二代目サウザントマスターなのです！（キリッ）

どうしてこんな中途半端なところだけは父さん譲りなんでしょうか？
正直なところ神を恨みます……。

変態、授業をする（後書き）

段々クオリティが……早く修学旅行編に入りたい……

月詠たんは……ハアハアw

変態、歓迎会を受ける？

初日の授業も終わり、真名ちゃんや刹那ちゃんの部屋に戻ってカメラでもつけようかな？って感じで部屋に戻ろうとしたところ、真名ちゃんに連行されました。

バレましたかね……。

「で、急にどうしたんですか？真名さん。

愛の逃避行とかも良いんですけど、俺たちは生徒と先生ですし……」

「授業を始める前に生徒の一人に手を出したあなたがそんな事を言うとか、あり得ないぐらいの違和感がヒシヒシと伝わってくるよ、サギ先生？」

「まあお遊びはこれぐらいにして……本当に何の用事ですか？昼間から侵入してくる馬鹿なんていないと思うんですけど？」

「別に大した用事では無いさ。ただの歓迎会だからそう身構えなくても良い」

知らず知らずのうちに身構えてたみたいですね。

ダイオラマ魔法球に適当な魔法生物をぶち込んでトレーニングをしてた時に培った技能です。

予想外の事態が起きたら臨戦態勢……ってね。

それにしても忘れてましたね……歓迎会イベント。

タカミチに読心術使っただけ？まあどこでもいいんですけどね。

ちなみに、昔読んでた二次創作は大概ネギと仲が悪かったですが、別に俺はそんなことはありません。

年上なんだからある程度は寛容な態度で観れますし。魔法学校でも嫉妬は受けていましたが苛めは一切受けてませんでしたね。ていうか、寧ろネギが省られているのでは……？って思ったほどです。

近くにはアーニヤしかいませんでしたし……。

それなのに何処で天然ジゴロとも言える程の誑しになったんでしょう？気になります……。

「「「ようこそ！ 2-Aへ……」」」

どうやら気付かないうちに入っていたみたいですね。

夢遊病みたいに偶に無意識で動く場合があるのが怖いです。

「いいっていいって！」

で、ネギ君の弟のサギ先生に、ちょっと聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

「別に構いませんよ？えっと……朝倉さんでしたっけ？」

「お！もう覚えてくれたんだ！それでね、質問なんだけど——」

手にテープレコーダーって……どんだけやる気なんですか。

俺なんて特に聞くことないと思うんですけどね……。

「んじゃ、まずは一つ。ネギ君とは兄妹なんだよね？年は近いしやつぱり双子？」

「ええ、そうですよ。ネギが兄で俺が弟。まあ双子なんで生まれたのが一瞬早いか遅いかの違いだけですけどね」

「ふむふむ……好きな食べ物？」

「美味しい物ですかね？甘い物も好きなんですけど、食べすぎは良

くありませんからね。

日本に来てハマったのは刺身とか納豆ですかね？特に刺身は魚を生で食べるっていう発想は向こうに無かったので。中々斬新で美味しかったですよ」

「へえ、日本文化に早くも適応してるんだねえ。その敬語は地？今は先生とか生徒とか抜きにしてもっと砕けた喋り方をしてもいいと思うよ？」

「まあ普段からこれですからね。基本は似非敬語口調ですよ。日本語を勉強するのに難しかったんで敬語のみをやりましたからね。怒ってしまうと敬語が崩れてしまうかもしれません……」

「あはは、そりゃ怖いねえ。んじゃ先生、また今度ねえ」

「元気ですね……、ネギが早速タカミチに読心術を使おうとしてるの
で早速向かいますか。
なんか……アスナンを弄れる気がしますし。」

「なんで私がこんな所に来なきゃいけないんだよ……」

「せっかくの美貌がぶつぶつ言ったら台無しですよ？ちうたん」

「なっ！てめ……え。ってサギ先生！どうしたんですか……？」

アハハ！と笑ってごまかす長谷川千雨13歳。趣味はコスプレでネットでの姿は……

「なんか失礼なこと考えてねえか？先生」

「あれ？あの変な敬語辞めたんですか？それよりどうです？この非常識な空間は？」

「……あんたは何か知ってんのか？
敬語だつてしたくてしてる訳じゃねえ。第一、変な敬語って言った
らあんたもそうだろうが」

「まあこれは癖ですし、気にしないでください。
何か知っている、っていうのはどういう事ですかね？
どうして麻帆良が異常なのか……は、知っていますけどね」

「それを知ったら私はどうなる……？」

「そうですね……、夢と希望【殺戮と絶望】が蔓延する世界にご招待♪」

「つていう所ですかね？ 非常識に頭までどっぷりと浸かりたいなら教えてあげますよ？」

変な副音声が聞こえた気もしますが気のせいです。

「ちよつと千雨ちゃんの顔が引き攣っている気もしますがどうしてもしてでしょう？」

まさか千雨ちゃんも副音声が聞こえたんですかね？

「どうしてそれを私に教えるんだ……？」

「仮に”夢と希望の蔓延する世界”つてのが有ったとしてもそれは普通の人間は入っちゃダメなところなんじゃないか？」

「千雨ちゃん、異常ってどういうことか分かります？」

「そりゃあ……普通とか離れた周りと違う存在だろ。それが何か今の話に関係でもあるのか？」

「大あります。千雨ちゃん的にはクラスのみんなや俺みたいな十歳の子供が先生をやるのは異常だと思いますか？それとも普通だと思いますか？」

いますか？」

「んなもん異常にきまつてんだろ。結局何が言いたいんだよ？」

「ここの人たちにとってはそれが普通なんですよ。

他のみんなからしたらある意味、千雨ちゃんが考えてる事自体が異常な考え”なんですよ”」

「私は普通だ！」

机をバンツ！と叩いて立ち上がる。

そんなことしたらクラスの格好の的なんですけど……。

「あ、皆さんすいません。それと千雨ちゃん。あなたは世間一般で観れば普通ですよ」

最後にニコツとスマイルを送りその場を後にします。

あの程度ではちうたんフラグは起ちません……よね？

そのころのエヴァンジェリン達

「ご主人様が他の女と……。もう虐めてもらえないのかな……」

「大丈夫です、マスター。サギ先生はきっとマスターの事を思ってくれてます」

「そうだよね！ご主人様が私を捨てるはずないもんね！」

（ああ……。マスターの幼児退行した姿……。これは嚴重にロックを掛けて保存しなければ……）

「ふむ、ではそろそろ帰るか、茶々丸」

「ええ、マスター（幼児退行するのはサギ先生の時だけなんですけどね……）」

変態、歓迎会を受ける？（後書き）

エヴァはサギが絡むと幼児退行！って感じにしてみました。

最初はヤンデレにしようかなあ？って思ってたんですけど、
自分じゃどうせヤンデレを生かきれないんでこうしました。

原因は勿論……。

変態、歓迎会を受ける？

「やつ、どうしたんですか？三人とも？」

「えっ！？サ、サギッ！？何もないよ！」

「サ、サギ、ど、どうしたのよ？」

なんですか……その如何にも自分悪い事やってます！みたいな感じ。

ネギは10歳だから分かりますけど……明日菜さんは……ねえ？

大方、読心術でしょ？俺が代わりにやりましょうか？
そんな杖持ってちゃ直ぐにバレてしまいますよ？

念話を飛ばします。

ああ、明日菜さんには俺が魔法使いつてことはばれましたよ？

バカネギが口を滑らしちゃったみたいです。
なんていうか……馬鹿もここまで来ると清々しいですね、普通に考

えたら弟は魔法使いじゃないと誤魔化すと思うんですけど？俺と一緒にオコジヨ心中でもするつもりですか？勘弁してください。

明日菜さんに記憶の事はまだ話してません。

ある程度は魔法の怖さ・危険さ・恐ろしさを味わってから、それでも記憶を戻したいのかを聞きませんか、軽い気分で記憶を戻してしまうと危険ですからね。

一気に人格とかも変わる可能性が有りますし。

というよりも、十中八九変わりますね。神楽坂明日菜として生きた時期と、アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアとして生きた時期では十倍近く違いますしね。

え？サギって普通の精霊魔法は使えないんじゃないんですか？

ん？別に読心術は魔法だけじゃないんですよ。

スタン爺さんも言っていたでしょう？魔法は万能ではないと。

ふっ、俺の女子をヨイシヨする技術をそこで見るといいですよ。

それよりもタカミチは何を考えてるんですかね？

いくら読心術が下らない事に使われているからといってそれを放置

するなんて……。

やっぱりこの学園は”英雄の息子”を異常なまでに庇うみたいですね。

まあそんな正義バカだからこそ、簡単に操れますし、自分がやりたい放題できるんですけどね。

「タカミチ、タカミチ。タカミチは何のために戦うんですか？」

ここは真剣な表情で聞きます。

目をシャキッ！とさせてタカミチの目から視線を放さない。

これにはタカミチも本気の質問だと思ったのか、年の割に老けている身体を立て直し、座り直す。

これからは少し真剣な読心術の始まりです。タカミチの代わりに境界を張ります。

一瞬で境界を張った事に、ネギやタカミチが驚いた顔をしますが、直ぐにそれを戻す。最も、ネギは気になって気になって仕方ないぐらいにウズウズしているのを無理矢理抑え込んでる感じですけどね。

「僕は……守るためかな？」

ナギさんやラカンさんが紅き翼で闘っているとき、僕は何もできな

かった。何も、守れなかった」

ずっと、こういうタカミチで居て欲しかったです。

腕を少し震わせ、昔の事を思い出すかのように上を向き、ゆっくり、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「何を……守りたいのですか？自分を？生徒を？明日菜さんを？俺たち兄弟を？世界を？全てを？」

うつうつん、タカミチは一息継いだ後に否定し、更に続ける。
今度もまた、ゆっくりと、自分の信念を思い出すため。

「僕は弱い。それこそ君の出したアレにも恐怖してしまうほどにね。けどね、僕は一度決めた物は絶対に曲げないと決めてるんだ。例え、無理だとしても。僕は大切な物を護る。自分の、命に変えても」

「……大丈夫ですよ。タカミチは確かに俺よりも弱いかもしれませんが、普通の魔法使いに比べると断然強いです。全ては守れないかもしれませんが、大切な物を護りたいという気持ちが有れば、きっと護れますよ」

タカミチは俺の言葉にハハハッと笑う。

……何か俺、変なこと言いましたっけ？普通に思っている事を言うただけなんですけどね。

「なんだか、軽く馬鹿にされてるみたいだけど、何かやる気が出てきたよ。」

やっぱり君はナギさんの子だよ。ナギさん譲りの固い意志。それさえあれば、君も僕も大丈夫さ」

「まあ、俺とネギは父さんの子ですからね」

それだけ言っただけ俺は結界を解いてその場を後にします。
そのあとをネギ、明日菜さんと続きます。

「で、どうだったのよ、サギ？タカミチ先生は私の事をどう思ったのよ？」

「ん？大切な護りたい人と思ってましたね。まあ恋愛感情は無いみたいですけど頑張ってくださいね。」

大切にしたいという保護欲は時として恋愛にも変わりますからね」

「へ、へえ、嬉しい事言ってくれるじゃない。要するにまだチャンスはあるってことよね！」

よし！頑張るぞー！と気合いを入れるバカレッド。

多分今の言葉の意味がわからなかったんでしょうね。なんとなく不憫です……。

ところでサギは何処で読心術を習ったの？

ああ、あんなのその場任せですよ。

ええ！そんなのでもいいの？アスナさん凄い張りきっちゃってるよ！？

まあ嘘はついてませんよ。タカミチは間違いなく明日菜さんを護りたいと思っているでしょうし。

そもそも、人が幸せになれるんだったらある程度は何をしても大丈夫なんですよ。

へえ、そうなんだ。

ええ、そうです。

あれ？今気付いたんですけど、明日菜をネギの従者にするってことは護れなくなるんじゃないの？

どうもタカミチは思想と行動が一致してない気がする……何か変な気がしますね。

変態、歓迎会を受ける？（後書き）

ちよつとサギ君を真面目にしてみました。

タカミチに……ビミョーなフラグを立ててみました。

このフラグを使うのかは……これから次第です。

変態、図書館に行く

さて、ようやく図書館島イベントまで着ましたね。

ドッジボール？惚れ薬？何の事だか分かりませんね、

ドッジボールのときにこっそり盗撮してたなんてありませんし、

惚れ薬を事故に紛れて飲もうとなんかしていません、ええ絶対です。

ではさり気無く皆さんの前に現れますか。

「待つんじゃよ、サギ君」

殺す……俺の願望を邪魔をするぬらりひょんはこの手で絶対に殺してやる……。

死にくされ！この変態や「ふお！待つんじゃ、サギ君の為に……おきの場所を用意したのじゃが……どうかのう？今なら素晴らしい視線で見れるん「乗った！」「じゃ……早いのう」

なんか爺がどや顔してるのが猛烈に腹がたつが……仕方ない。

あの石像だって学園長が操ってる物だったし、素晴らしい目線のツイッターゲームを俺に見せてくれるだろう。俺は言われた通り、学園長へ着いていく。

「どうじゃ！すばらしい視線じゃろ！？」

「これは……なんて破壊力だ！俺の息子が……ゴホッ、中々にいい視線ですね。学園長もたまにはですけどいい仕事しますね」

「サギ君……今は別に変な敬語を使わなくてもよいぞ？本当の君の喋り方はそんな似非敬語ではいじやる？メルディナ魔法学校からもそんな変な敬語を使う子だとは聞いておらんし……」

「まあ……確かに本来の喋り方ではないですけど、俺はこれで良いんですよ。

最近ではこちらでばかり喋ってて、考え事をしている時もこの口調ですしね。

目の前の画面ではツイッターゲームが行われている。

あの石像は学園長が動かしているみたいだが、流石は麻帆良最強の魔法使い。

俺と話しながらでもたやすく石像を動かしている。

「では、俺はこれでお暇させてもらいますね」

「どうしてじゃ？まだ時間はあると思うのじゃが……？」

「うつすらと感じるんですよ、ロリコン特有の気配が。母さんとも会ってきますよ。学園長なら意味、分かるでしょ？」

「ああ、彼か。

しかし、最近の彼は麻帆良祭でも姿を見せられぬほど弱っているようじゃが……」

「大丈夫ですよ。彼ならきっと……この動画（エヴァお漏らし動画）を見せればいけるはずですよ……」

「あの動画……？まあ好きにするがいいぞ。
わしはネギ君達の様子をもう少し見てようかのう……」

「こんばんは、アルビレオさん」

「ここでは私の事はクウネルと呼んでください。
クウネル・サンダース。いい名前でしょう？」

ベッドに寝転がりながらこちらに話しかけてくるアルビレオ・イマ。
理由が有るのかどうかは知らないがクウネル・サンダースと呼んで
欲しいらしい。

ケンタッキーにでもハマったんですかね？個人的にはクリスピーが
最高ですね。

オリジナルチキンなんて王道すぎて欠伸が出るほどです。

「ところで、何の用ですか？サギ君。私としてはもう少し後に君や
ネギ君と会おうと思っていたのですが……、それにしても良く私の
場所が分かりましたね？しかも、正面玄関からではなくいきなり出
てくるなんて……驚きましたよ」

「ええ、俺は普通の精霊魔法が使えないので……。魔力で空間を強
引に決じ開けたんですよ」

「ああ、あなたはきちんとナギの才能【バグ】を受け継いでいるのですね。

普通は魔力で空間を挟じ開けるなんて無理ですよ？その調子だと兄の……ロリ君？でしたっけ？彼も君のようなバグなんですかねえ？」

「ネギですよ。野菜の葱。それにしても父さんは何を考えてるんですかね？

一人は野菜の葱で、もう一人は犯罪の詐欺ですよ？母さんも止めて欲しいもんですよ。

ああ、それとネギは天才ですけどバグではないですね。良くも悪くも天才で純粹ですし、あのままだったら知らず知らずの内にメガロの犬にさせられますね。

将来の夢も”立派な魔法使い”ですし。魔法を悪い事に使うという発想も無いぐらい純粹ですよ」

俺がそう言つとクウネルは少し困つた様子を見せる。

この人もやはりメガロメセンブリアを恨んでいるんでしょうね。

完全なる世界に事実上の支配を許していただくに、

そちらが敗北したと同時に母さんを黒幕に仕立て上げ死刑。

その後は父さん達”紅き翼”が自分たちの配下であるかのように、半ば強制的に立派な魔法使いの称号を押し付け、更にクウネルが知っているかは知りませんが、俺たちの村を悪魔によって襲撃させると言つ暴挙。

俺だって許してはいません。

特に最後の暴拳など弁解の余地もないほどです。

しかし、それでも彼らとある程度の同盟程度は組んでおかないと俺の夢は叶いません。

それを叶える為なら、多少は我慢できると言うものです。

「まあそこはサギ君がフォローしてあげてください。

私や詠春やガトウも、あなたの父さんを大戦中はたっぱちフォローしてあげたのですよ?」

クスクス、と心底愉快そうに笑うクウネル。

それから……と続け、少し顔が真剣になり、こちらを見つめてくる。

「あなた、中々良いからだですね。どうですか?ネコ耳やスク水を着てみませんか?

ナギの息子と言う事を考えると少しムズ痒いですが……どうです?」

出ましたね!ロリコン紳士!

これですよ！このタイミングを待っていたのです！

「ああ、そうそう。」

関係ない話ですが少しおいが有るんですが、大丈夫でしょうか？」

スルーですか……とぼやきながら明らかな落胆の色を見せるクウネル。

やはり危険ですね……。俺は男の娘の存在を認めません、やっぱり女性は本物の女の子に限ります。

それから、まあ別にナギの息子の頼みですしいいですけど……と呟く。

「クウネルさんのアーティファクトで母さんに会わせてください」

「アリカ王女にですか？てっきりナギの方を要求してくると思ってたのですが」

「まあ父さんとの会話もしてみたいですけど、父さんに一度会って仮契約もしましたしね。」

ある程度は話せたので母さんに会ってみたいのですよ」

「父親と仮契約とは……なんとも、また……」

直ぐにやってあげてもいいのですが、今の私は諸事情で麻帆良祭の間でしか力を発揮できないのです。

すみませんがもう少し待ってくれませんかね？」

ええ、そうですね。

しかし、私達は変態と呼ばれる部類。

変態力は時に世界のルールをも超越するのです！

「そうですね、まずはこのDVDを見てきてください。大体編集してあるので数十分で見終わると思います。それまではこの本でも見させて頂いても良いですか？」

「ん？別に構いませんが、DVDを見たところで無理な物は無理ですよ？」

そういい、ゆったりとした歩幅で奥の部屋へと入っていく。

さて、俺は新しい魔法でもメモしときますかね。ここは禁書もあるみたいですし。

メモするぐらいなら……構いませんよね？

「みなぎってきました！！
今なら行ける気がしますよ！同士、サギ・スプリングフィールド！
アデアット、イノチノシヘン！」

ふわっ……と、クウネルの周囲に大量の本が出現しました。
正直、緊張の対面です。母さんは写真でしか見た事ありませんか
らね。

「完全再生は10分間のみです。親子の再開……楽しんでください」

それだけを言い残し、クウネルの姿は変わる。

俺が会おうと思っていた母親。アリカ・アナルキア・エンテオフュシアに。

変態、図書館に行く（後書き）

変態は全てに優る力となる！

頑張つて長く書こうと思ったのですが、
3000文字で妥協してしまいました。

今回は少し書き方を変えてみたんですけど、どうですかね？
もし良かったら感想を教えてください。

変態、テストを終える（前書き）

なんていうか……投降したつもりが消えてたので割り込み投稿します。

変態、テストを終える

こんばんは、サギです。

母さんとの会話が終了し、自分の考えがきちんと決まったところです。

母さんとの会話は中々に楽しかったですよ？

父が生きていると言う事は、母も生きている事でしょうし、今度は本当の意味で両親に会いたいです。

「あゝ、ネギ先生と一部の生徒は、図書館島で行方不明になりました。

諸事情でしばらくは戻ってこれそうにないので、これからの英語の授業は自習になります」

行方不明という言葉に刹那さんが、ネギ先生が行方不明との言葉で雪広さんが、過剰なまでに反応しています、雪広さんに至っては、身体を悶えさせながら教室の床で転げまわってますね。

しかし……どうして子供が好きなのに、俺に対しては普通の扱いなんでしょう？

ネギみたい……ギョツとされるの期待してたんですけど。

「まあ、行方不明の生徒たちは、後日追加課題をさせられるようですし、

俺たちは彼女たちの分まで点数を取る勢いで勉強しましょうか。

いくらなんでも、このクラスの成績は低すぎますし、このクラスが最下位を脱出したらネギと俺も麻帆良に正式雇用されることになりますから」

「先生、質問！

つてことはもし再開なら二人は辞めちゃうんですか！？」

「それは無いと思いますよ。

多分、教育実習生のまま放置されるだけですな。

まあ俺の給料もUPして欲しいので皆さん頑張ってくださいね」

「えっ！本当にサギ君は10歳なの！？」

「ん？ああ、給料の事ですか？

そりゃあ、お金が有るに越したことはないですよ、お金が有ったほうが自由に行動できますし」

やっぱりサギ君って大人に見えるよね、とか。

ネギ君もサギ君も辞めなくて良かった、などなど、色々なセリフが

飛び交っています。

なんていうか……サギ君とか言われたらムズ痒いですね。
教師と生徒と言つ關係上は仕方ないのかもしれませんが……。

「はい！と、いうことで。今からは自習です。

俺はここにいますんで質問のある人はこっちに来て下さいね」

「一位おめでとつございます！
皆さんに賭けた食け……ゲフンッ。一位のトロフィーも貰えました
し、

俺とネギも正式に採用されることになりました」

「せんせー、ネギせんせーとバカレンジャーは何処にいるんですか？」

「フッフ、お説教中ですよ、
食券が大量にあるので、このまま彼女達を拾って打ち上げに行きま
すよ、

俺が全額出すんで自由に食べまくってくださいね」

俺がそう言つと、生徒全員が歓声を上げて教室から出て行きます。
今から行っても新田先生の説教に巻き込まれるだけなんですけどね。

そのころのネギ＋バカレンジャー達

「いいですか、ネギ先生！あなたは教師です。

教師は生徒を正しい方向へと導く者、それなのに夜中に図書館島に
忍び込むなんて、

それがどれほど危険なことか分かっているのですか！？だいたい、
あなたは――」

「はい……すみません……」

変態、吸血鬼事件をスルーする（前書き）

今回は関わりません。

っていうか、関わったらエヴァがまともに戦えない気がするww

抜けていたので13部を挿入しました 2 / 16

変態、吸血鬼事件をスルーする

さて……、最近とある噂が流行っています。

その名も、”桜通りの吸血鬼事件”です。解呪は既に終わっている
ので、恐らく学園長がエヴァに頼んだんでしょうね。そのために一
般人も巻き込むなんて……。

ちなみに、今の俺は学園長室に向かっているのです。

恐らく、俺の実力的にエヴァと闘わせる必要がないと思ったんでし
ょうね。正解です。

俺が苦戦するとしたら、理不尽な強さを持つジャック・ラカンぐら
いでしょうか？

なんか本気で殴っても、”気合防御！”とか言われて防がれてしま
いそうです。

エヴァやタカミチは唯の最強、ですからね。

タカミチが最強かは知りませんが……。一般的にバグと呼ばれてい
たジャックは恐ろしすぎです。

俺はぬらりひょんへと続く扉をゆっくりと開けます。

一応は学園長ですしね。馬鹿みたいに扉を蹴り開けたりはしません。

「で、用事とは何ですか？その頭の中身を見せてくれるのでしたらお手伝いをさせていただきますよ？」

「ふおっ！さ、流石にそれはやめてくれんかのう。」

用事というのは、君も予想している通りの事じゃよ。

エヴァがネギ君と闘うのを邪魔しないで欲しい。もしそれに誰かが関わるなら……その子も放っておいてあげてくれんかの？」

「別に無理に取り繕わなくても構いませんよ。」

明日菜さんにはまだ記憶の事を話していませんし。遊び程度の戦いでエヴァが間違っただけで殺す、ってのもないでしょうしね」

「少し驚いたね。君なら直ぐに明日菜君に教えそうなもんなんだけど」

いたんですかタカミチ……。

姿を見せずにいるのはぬらりひよんの固有スキルでは……。

「はっ！まさかタカミチもぬらりひよんだったのですか！」

「いきなりどうしたんだい？それに僕は人間だよ！？」

ナイスツツコミです。

まあ、タカミチの質問にも答えてあげますか。

「明日菜さんの記憶は恐らく、俺が想像しているよりも重いのでしよう？」

俺もある程度は調べましたが、ガトウさんの事は深く知りませんし。大した覚悟も無い内に記憶を戻してしまうと、最悪に場合に精神崩壊する可能性が有りますしね。

まあそうなる可能性は低いとは思いますが……。俺個人としては命を賭け死闘などをした後で、魔法の恐ろしさを再認識した後で記憶を取り戻すか、取り戻さないのかを聞きたいです」

「ふむ……僕としては記憶を封印したまま、彼女には幸せな人生を送って欲しかったんだけどね」

「そう言ってもスプリングフィールドと再び関わったんですから先ず無理でしょうね。」

それが意図的でも偶然だったとしても、彼女は再び関わってしまったんですから」

学園長をスツと睨みつける。

彼女を再び巻き込んだのはお前だ、とね。

しかし、その学園長とくれば何処吹く風状態。

タカミチの方を向いて、真剣に話を聞くふりをしています。

恐らく、タカミチは今揺れていますね。

今ならまだ間に合う。彼女に幸せで、危険のない人生を送らせてあげれる。

しかし、それは学園長が許さないでしょうね。

せつかくの英雄の従者の第一候補をみすみす逃したりはしないでしよう。

「その意見にはわしも賛成じゃの。

ネギ君も明日菜君もまだ魔法の危険性を理解しておらん。

今のまま記憶を元に戻すとパニックになるじゃろうな。

しかし、別にエヴァとの戦いの後ならば構わんのじゃないかのう？

彼女は真祖の吸血鬼【ハイデライト・ウオーカー】じゃぞ、魔法の危険性を感じ取るのには最適の相手じゃと思うんじゃが」

「そこですよ、そこ。エヴァは唯の真祖の吸血鬼なんですよ。

別に殺人狂でもなければ、自分に復讐を誓い命さえも顧みない馬鹿とは違うんです」

「本当の殺し合いを体験させる必要があると……君は言いたいののか？」

今度は学園長の目が細くなります。

既に見えてるの？ってぐらいまで細められた目が更に細くなる……
気がします。

「ええ、こんな茶番劇みたいに仕組まれた試合ではなく、本当の意味での死合をするべきですね。

別にそれを影から観察してても良いんですよ。今のままだと多分――

――

少し真剣な空気を醸し出し、

――死にますよ？と続ける。

「本当の意味での英雄にでもしたいんなら今から人を殺す訓練でもさせた方がいいですよ。

いくら”真祖の吸血鬼を倒した英雄の息子”という輝かしい経歴があるうが、戦場ではそんな関係ありませんね」

「サギ君……君は戦場に――」

「——当然でしょう？」

父さんや母さんを探すにも、世界を救うにも、絶対に人を殺す必要が出てきます。」

それでもかつては魔法の導き手と言われた魔法使いですか？」

「しかし——」

「——俺はもう出て行きますね。」

心配しなくてもネギの成長の邪魔をするつもりはありませんよ。
いくら茶番劇とはいえ、格上相手の戦い方ぐらいは練習になると思
いますし。」

では、失礼します」

言いたい事だけを言ってその場を後にします。

出て行く寸前に、難しそうな顔をしたタカミチがいましたけど関係
ありません。

多分、タカミチは悩んでいるんでしょうね。

ネギを明日菜さんを、どうすればいいのかを……。

変態、吸血鬼事件を見物する（前書き）

かなり久しぶりの投稿です。

正直今までは書き溜めで乗り切ってました^^；

変態、吸血鬼事件を見物する

一年に二回の大停電の日、サギは橋の近くで気配を完全に消し、とある勝負を見ていた。

原作通り、ネギにオコジヨの助言者がつき、茶々丸はネギに襲撃（笑）された。

そんな事が行われていても、サギは一切の感知をしなかった。なぜなら、この事件は原作において必須とも思われる事件に思われたからだ。

もしカモを殺せば、仮契約の陣が書けなくなり、従者が一切いない状態で今後戦うことになる。

そんな状況になれば、サギがいくら協力したところでネギは死んでしまっだろう。

そんなシチュエーションはサギが望んでいることではない。少なくとも、ネギには魔法世界に行ってもらいたいのである。

「ハハハ、中々に愉快だな。

その程度か？私を倒して奴の居場所を知りたいのならば、私が生徒だと言う事を忘れ、本気で来るがいい、ネギ・スプリングフィールド」

「うっ、僕が勝ったら絶対に悪いことをやめてもらいますからね！

契約執行90秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！！！」

「ハッ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・氷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け！！魔法の射手・連弾・氷の17矢！！」

「クッ、ラス・テル・マ・スキル・マギステル・雷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け！！魔法の射手・連弾・雷の17矢！！」

お互いの魔法が相殺される。

そうは言っても、実際はエヴァがネギの魔法の矢にわざと撃つているのだらう、

それに加え、停電で魔力が戻りつつあるエヴァならば、相殺もあり得るかもしれないが、

今のエヴァは封印完全解放状態。相殺になる筈もない為、恐らくは手加減でもしているのだらう。

なんやかんや言っではいるが、エヴァは女・子供を殺さないといった信念の持ち主であり、

本来の性格は酷く優しい物なのだらう。

「ハハ！！雷も使えるとは！！だが詠唱に時間がかかり過ぎだぞ！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・闇の精霊17柱、集い来たりて敵を切り裂け！！魔法の射手・連弾・闇の58矢！！」

「58ツ！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル・雷の精霊29
柱、集い来たりて敵を切り裂け！！魔法の射手・連弾・光の29矢
！！」

ん……？エヴァの放った魔法の矢が原作の二倍ですね。

当然、相殺できなかった分の29矢がネギに降り注ぎます。

闘い慣れてないネギに、自分にあたりそうな部分の魔法の矢だけを
撃ち落とす事など出来ず、

みるも無残な姿で、明日菜さんが悲鳴を上げています。

それにしても……、どうして魔法の矢の数が増えたんですかね？

俺は直接かわってない気がするんですけど……バタフライエフェ
クトって奴ですか？

まあこれでネギも倒れたし、明日菜さんも茶々丸さんに取り押さえ
られたし、終わりでしょうね。

「僕は……負けるわけにはいかないんだ……！！

ラス・テル・マ・スキル・マギステル・来れ雷精・風の精・雷を纏
いて吹きすさべ南洋の嵐！！雷の暴風！！」

「その年でその呪文、それなりに訓練を積んできたんだろうな、
だが、貴様に降りかかる火の粉はその程度では無駄だ！！貴様の父

や弟のように圧倒的な力がなければ、
貴様は生きる事さえも叶わん！！闇の吹雪！！」

無詠唱魔法と詠唱魔法、本来ならば魔力に大して差がないため、エヴァの闇の吹雪が撃ち負けます、
しかし、そこは600年生きた真祖の吸血鬼、魔力を効率よく運搬し、限られた魔力で限りなく高い威力の魔法を放っています。

そういえば……最近俺も普通の魔法を使っていないですね。
少しは練習しないと父さんみたいにアンチョコみながらじゃないと詠唱できなくなりますからね。

最後にネギが「サギが……？」って言ってたような気がしますけど気にしません。

まあ余計な事を言ったエヴァにはお仕置きをしませんとね……。
今から楽しみですよ……フフフ。

変態、警備の仕事をする

「よっ、っと。大丈夫ですか？お二人さん。
悪いけど君たちは退場してもらっよう？剣よ、舞え、切り刻め」

「なっ……、相変わらずの無茶苦茶だね、サギ先生」

「助かりました……有難うございます」

夜のお仕事にも精を出しているサギです。

本当ならば、今日は非番なのですが、二人がピンチと学園長から聞いたため、急いで来たんです。

みた感じ二人ともボロボロですし、これは急いで正解でしたね。

「っと、油断しないでくださいよ？まだまだ敵さんは健在のようですし」

「それは勘弁してほしいな、こっちはもう弾切れなんだが……」

「すみません……先生。私も気が殆ど残っていないので役に立てそうにないです」

……何気にピンチ……？

俺の魔法って基本的に周りを気にしながら使えるもんでもないんですけどね……。

剣を操作するのも中々難しいですし、近くにいたら味方にも当たりますしね。

「ん？逃げるのも……無理みたいですね。後ろにも回り込まれてみたいですし。どうします？俺的には二人を巻き込まずに闘うのは少し難しいんですけど……」

「少し難しいだけだろ？それぐらいなら頑張ってくれないかい？ある程度は好きな形で支払うよ？」

「ッ、真名ッ！いきなり何を言ってるんだ！？相手はあの変態のサギ先生だぞ！！そんなことを言ったら……」

「刹那がね」

「おいっ！ふざけるな！私にはこのちゃ……、ゴホンッ、まだ獣に襲われるつもりは無い！」

「へー、刹那ちゃん俺の事をそういう風に思ってたんですか、まあいいですよ、事実ですし。少しも恨んでいませんよ？ええ。ただ夜中に手錠がつけられて何処かに括られる運命になる気がしますけど……」

「敵の目の前でペチャクチャ喋るたぁいい度胸してんなあ？兄ちゃん達」

くだらないコントをやっていると後ろから鬼が棍棒を俺目掛けて振りかぶってきます。
その鬼の棍棒を素手で止め、神機”金剛粉碎棒絶”で鬼な腹をフルスイングします。

鬼を吹き飛ばして一気に還そうと思ったのですが、威力が高過ぎたからか、鬼が吹っ飛ばずに返ってしまいました。刹那さんと真名さんが若干呆れた顔でこちらを見ますが気にしたら負けだと思います。

「その調子なら直ぐに終わるんじゃないのかな？いきなり手に武器が出てきたのはびっくりしたけど……先生の事で一々吃驚していたら溜まったものじゃないからね」

「サギ先生、どうかお願いします。今の私たちじゃ少し厳しいですし……逃げたら学園に被害が及ぶもしれませんし……」

「いや、十中八九、木乃香さんが狙われると思いますよ。

鬼を使役してますし、西の手の物でしょうからね

多分ですけど学園って言うか木乃香ちゃんが浚われて終わりだと思いますよ？

まあ刹那さん的にはそれが一番まずいと思うんですけどね」

「ッ！！そこまで分かっているなら、どうか助けていただきたい……」

……

「まあやりますけどね、どーせ学園長が遠見の魔法で観てるんですよし、

俺が魔法を使えない唯の召喚術師と思われるのも癪ですし」

”アベアット” そう呟いて俺は指輪を戻します。

それと同時に、俺の身から溢れ上げてくる魔力。

これが俺のアーティファクト”王の根源”

魔力の大幅封印の代わりに、ありとあらゆる呪い、いや、自分に不利益を被るであろう呪いや魔法を完全に無効化する能力。これを付けているかぎりには、アーウェルンクスの石化魔法も、のどかさんが

後で手に入れるはずの”いどのえにつき”さえも無効化できます。

俺は不老不死に近い存在ですが、幾らなんでも大量の術者に呪いを重ね掛けされて、一気に封印でもされてしまつと終わりですからね。

「な……なんなんですか？この馬鹿げた魔力は……。このちゃんの潜在魔力さえも遥かに……」

「い……幾らなんでもこれは……驚いたね。ここまで巫山戯た魔力を持つているのは先生ぐらいじゃないのかな……？サウザントマスターでもこれは無いと思うんだが……」

「そんなに多いですかね？……ああ、多分世界樹が近くにありますがからね。それに魔法球の中でもずっと魔力を吸収し続けて強引に俺の限界値を伸ばしていたからですかね？まあ、どこでもいいんですけど。」

久々に精霊を行使するってことで抑えきれるか自信はありませんけど……」

「セギ・ハック・サ・タイスシ

契約により我に従え 高殿の王

来れ 巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆

百重千重と重なりて 走れよ稲妻
” 千の雷！！ ”

”千の雷は雷系統最強の呪文。”

本来ならば無詠唱でも発動できる呪文をたっぱうりと時間を掛けて詠唱したため、

威力は尋常ならざる物となる。

雷が弾幕の様に鬼へと迫り、辺りの木々を薙ぎ払い、隕石でも落ちてクレーターでも発生したかのような地面へと変化する。

当然、鬼の方向には敵の術者がいる訳で……。

「あ……術者の存在忘れてました……」

.....

「ってことで帰りますね。後始末はお願いします♪」

そう言い、その場を急いで後にする。
そして自分が帰ったと思わせて油断させておいて……。

「刹那さん、刹那さん」

「え？なん……ムグッ……ン……ア……ハア、い！いきなりナニするんですか！」

刹那さんの後頭部を優しく抱き抱えて唇を頂きます。

テンションが上がって舌を入れちゃいましたが不可抗力です、可愛いのがいけないんだと思います。

「仕事料ってことで！真名さんは……しないんで銃をしまつて欲しいんですけど……。」

「ってことで今度は本当に帰りますね、責任とって欲しかったら何時でも言つて下さいね♪」

そしてルンルン気分で帰っていくサギ、顔を真っ赤にさせて未だに状況が理解できていない刹那、二度目の奇襲に備えて銃を構える真

名という、なんとも奇妙の構図が出来上がったのだった。

変態、警備の仕事をする（後書き）

今回はサギ君の精霊魔法行使の時間♪
刹那は……被害者ですwwww

変態、京都への準備をする（前書き）

最近かなりスランプかもです。

仮契約をどうするかが決まりません。

仮契約は言ってみたら自分の弱点を晒す様な物。

元老院に付けこまれるようなキャラじゃ駄目だし……うーん。

これから、更新がかなり止まると思います。

変態、京都への準備をする

早速ですが、学園長に呼び出されました。

まあ十中八九京都市行きの中止を仄めかす内容のものでしょうけどね。

「ええー！京都市行きが中止になるんですか！？」

「まあ大和撫子も捨てがたいですが、金髪ギャルも捨てがたいです
しね。」

「ハワイで良いでしょう、ワイハー、良い響きじゃないですか。んじ
やネギ、帰りましょうか」

「けど、京都には父さんの別荘があるんだよ！父さんの手がかりも
見つかるかもしれないんだよ？」

「サギは父さんに会いたくないの？やっと見つかった手掛かりなんだ
よ？」

必死の形相で京都に行きたいアピールをする。

もし俺がシヨタコンなら気が代わるだろうが、残念ながら俺にそんな
気はありません。

「一般的にオリ主ならここで」父さんなんて興味が有りません（キリ

ッ”とか言っんでしようけど、俺はそんなバカみたいな真似はしません。そんな事をして喧嘩になるだけですしね。

「ネギ、修学旅行はハワイで楽しみましょう。
その後に雪広さんにでも頼んでゆつくりと京都の父さんの家を見に行きましょうよ」

「で、でも！それだと遅いんだよ！
僕は早く父さんに会いたいんだ！」

「落ち付きましょうよ、修学旅行はたったの数日です？それに俺たちは教師ですよ？
自由行動を取れる時間も少ない。たったの短い時間で父さんを調べられるのですか？否！
ここは修学旅行をハワイにして、その後にゆつくりと京都に行つて父さんについて調べた方が得策じゃないですか」

「た、確かに……。そうだね、今回は大人しくハワイにでも行くか」

あまりの俺の気迫にネギが押し切られてしまう。
こういう事ころはやっぱり子供なんですな……。まあそんな性格だからこそ、メガロの元老院共に良い様にされるんでしょうけどね。

それにしても、ハッハッハ、ぬらりひよんの顔に焦りが混じっていますね。

どうせ、こっちの反応を楽しみたいとかでこんな事をしたんでしょが、俺を舐めてもらったら困りますね。逆にこっちがあなたを弄り倒してあげますよ。

「ま、待つのだじゃ！実はのう……向こうの嫌がっているのは関西呪術協会という組織での。」

そこに儂としては君たち二人に親書をもっていつてほしいのじゃ」

「俺はパス。ネギがやってみたら？」

こっとう所できちんと下積みをしていけば、何時かきつと父さんのようなマギステル・マギになれるよ」

「本当、サギ！こっとう仕事をやっていけば父さんみたいになれるの！？」

「ああ、そうさ。んじゃ、ってことでネギにだけ説明しといてください。」

俺は適宜サポートでもしときますんで」

「うむむ……出来たらサギ君にも手伝ってもらいたいのが……」

ふつ、やっぱりネギは単純過ぎますね。

マギステル・マギ、父さんみたいに、とかの言葉を使えば馬鹿すぎるぐらい純粹に扱えます。

恒例の如く、学園長の言葉は無視です。第一、あんなふざけた親書なんて見つかった瞬間に一気に襲われますよ。まあ俺は新しく考えた戦闘方法を身につけてきますか……

「なあエヴァ、俺に糸の使い方を教えてくれませんか？」

「え？別にいいけど……急にどうして？」

「新しい戦闘方法を思い付きましてね。糸を使って相手を一気に殲滅するんですよ」

「別に構わないけど、私の糸は人形に使うためのものだから攻撃には使えないと思うよ？」

「ああ……そういうばそうですね。まあそれでもいいです。では別荘に行きましょうか」

強引に話を進めて魔法球の中に入る。

なんだかエヴァの年齢退行が激しいなあ……などと思いながら、懷に潜ませた戦闘とは関係のない物を触りながら、ニヤニヤと笑っていた。

変態、京都への準備をする（後書き）

マジでヤバイです。何もアイデアが思い浮かばない。

再来週からテストですし、アイデアが浮かばないので更新が止まります。

週に一回以上を目指して書いていきたいと思っています。

それから、新作でNARUTOの二次創作も書き始めたので、そちらもお願いします。

予告（前書き）

スランプです……。

なんか書くこうと思っても書けないので予告だけ書かしていただきます。

ここからはネタバレ要素もあるので、それでもいい！って人だけ見てください。

新話が出来ましたら消す可能性はあります。

いいですね？

ちなみに、真面目なセリフだけを抜粋しておきます
ww

予告

——麻帆良祭——

「これが時間跳躍弾……確かに恐ろしい……。
けど、俺のアーティファクトは科学をも凌駕するんですよ」

「な、何故ネ！術式は完全に成立したはず……ッ！」

「残念でしたね。まあ貴方の術式は完璧でしたよ？
まあ安心してください、この魔力は俺が有効に利用してあげますから」

「ふう……まずは第一段階は成功しましたね。
後は……それなりに大変ですが、まあ大丈夫でしょう。
そろそろ叶いますね……、俺の夢……が」

——闘技場——

「どうしてだよ！サギと僕が協力すればきつと世界だって救えるは

ずだよ！」

「確かに救える”かも”しれませんね。けど！それはあくまでも”かも”ですよ！」

俺の親は彼らを苦しめざるを得なかった！なら、俺が彼らを幸せに生きさせるのは当然の義務だ！」

「くっ……流石はエヴァの固有技法だけありますね……。
けど！その程度の実力では世界は救えない！
来い、ツクヨミ！そして捕食！贅なり、糧となり、俺を昇華させよ
！」

——魔法世界——

「こんばんは、みなさん。

新たに新オスティア総督府の長となりました、——」

「術式の準備は済ましたか？では、これを使い——」

——以下は変態の戯言予告——

「大丈夫、貴方は普通ですよ……周りが異常なだけです……。
けど此処は異常な麻帆良の中、大丈夫ですよ、此処でナニをしても
それは麻帆良では普通なんです……」

「あ、羽根つて性感帯になってるんですかね？
木乃香ちゃんに触られてた時は気持ちよさそうでしたけど、刹那
ちゃんは百合属性ですからね。
そのせいで気持ち良かったのかもしれませんが……なので触らして

もらっても構いませんか？」

「フッフ、流石はエヴァ。良く出来ました。

ご褒美にナニをしてほしいんですか？きちんと言えたらご褒美をあげますよ？」↑ノクターンw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944q/>

英国紳士の弟は英国変態？

2011年3月28日19時12分発行